

ポートフォリオを活用した反省的実践家としての 小学校英語教員養成プログラムの設計と試行

北 條 礼 子*

(平成22年9月29日受付；平成22年10月19日受理)

要 旨

平成23年度より全国公立小学校において外国語活動（英語）が必修化されることになり、その担い手は主に学級担任とされている。小学校教員対象の研修が必要なのはいうまでもないが、外国語活動を担当できる教員養成も急務である。2008年1月から3月にかけて、ポートフォリオを活用した反省的実践家としての小学校英語教員養成プログラムを設計し試行した。学部生、大学院生計14名が参加し、同プログラムは参加者から高い評価を得た。

KEY WORDS

ポートフォリオ 反省的実践家 教員養成 出張授業 GT 小学校英語活動

1. 研究の背景：

1.1 小学校外国語活動（英語）の現状

文部科学省は2008年3月に新学習指導要領を告示したが、外国語活動は2011（平成23）年度より「総合的な学習の時間」から独立し、全国公立小学校の5・6年生において週1回年間35回程度必修化されることになった。さらに、小学校外国語活動は主に学級担任が担当することが求められており、この分野での教員養成は急務となっている。

2009年4月から6月にかけて文部科学省が実施した調査結果をみると、2009年度に5年および6年で外国語活動を実施予定の小学校は約97.8%であり、年間35時間またはそれ以上の時数を実施予定の小学校は約58%であった。また、2009年度年間授業時数の平均は、5、6年ともに約28.2時間であり、2010年度の予定年間授業時数の平均は5、6年ともに約32.2時間であった。この調査結果は、2011年度の完全実施を前に、全国の公立小学校が同活動に本格的に取り組もうとしていることを示している。

一方、旺文社英語教育研究室が2008年に全国の小学校と教育委員会を対象に実施した調査結果をみると、2011年度の必修化に向けて外国語活動の導入がスムーズに進むと思うか、という質問に対して、課題があり、導入には不安が残る、という回答数が全体の半数を超える52.5%であり、現場での不安が強いことがうかがえる。

1.2 文字指導について

平成13年度に文部科学省が作成し配布した『小学校英語活動実践の手引き』において、文字指導は推奨されていない。しかし、樋口編（2005）は、文字指導は児童の知的欲求や興味に合致していることなどをあげ、文字の指導をことさら遅らせる必要はないと述べている。文部科学省（2008）による平成19年度小学校英語活動実施状況調査結果の活動内容をみると1年生から「文字に触れる活動」が行われ、6年生では実施率が50%弱となっている。また、文部科学省が平成20年度に全国の拠点校に配布した「英語ノート6年生」のレッスン1、2においてアルファベットや色々な文字が取り上げられている。

ところで、ベネッセコーポレーションによる小学校英語に関する基本調査（2006）結果をみると、英語活動が嫌いな理由として児童があげた第一の理由は「英語を読むことがうまくできないから」であった。小学校英語活動では、読む活動がほとんど行われていないことから、児童が読めないのは当然のことであると考えられる。それにもかかわらず、児童が英語活動が嫌いな理由として「読めない」ことが第一にあげられているのは、実は英語を読みたいという児童の気持ちが強く反映されているのではないかと推測される。

野呂（2007）は、小学校からの文字指導の必要性を指摘している。小学校から英語学習を開始する場合には、英語活動の初期段階で大量の英語の音声に触れることにより音韻認識力を高めることがまず必要であり、慣れてきた段階で音声の構成要素と文字を関連づけるフォニックスの練習を徐々に取り入れ、書記素と音素の変換規則を身につけさせる必要があるとしている。このような訓練が小学校で十分に行われれば、児童は英単語がスムーズに読め、また書けるようになり、中学校での音読や文字指導における「つまずき」が少なくなると述べられている。

1.3 これまでの出張授業の経緯

2006年秋から筆者が中心となり、大学院生、学部生、研究生が構成メンバーとなる、ティーム・ティーチング（TT）形式の英語の出張授業を本学附属小学校の協力の基、同校において実施している。2006年度は出張授業の試行として3年生1学級で実施した。その結果が良好であったことから、2007年度は3年生全2学級を対象に実施した。この2年間に扱った内容はアルファベットの大文字・小文字の読み方とそのフォニックス読みの学習であった。

2008年度からは、例年10月から翌年2月にかけて、3、4年生全4学級で約10回の出張授業を実施した。附属小学校では30分のモジュール授業が実施されていることに合わせた毎週各回30分の英語活動である。小学校英語活動のねらいはコミュニケーション能力の素地を作ることとされているが、附属小学校では当時年間20時間程度の英語活動が行われていた。コミュニケーション活動は附属小学校が主に担当し、この活動を補完する文字学習活動として、大学からの出張授業を実施した。2008年度は中学年を対象とし英語の文字学習を中心とした。2007年度と同様に、3年生はアルファベットの大文字・小文字の読み方とそのフォニックス読みの学習を実施した。留意点として、3年生にとってこのような文字学習が退屈なものにならないように、ドリルの部分にゲーム性を持たせたカルタなどのカードゲームやピコピコハンマーゲームなどを取り入れた。4年生では、前年度のアルファベット大文字・小文字の読み方とそのフォニックス読みの学習の継続として、一歩進んだフォニックスの基本的規則を扱った。試行的な学習であるため、4年生児童の理解の状態を把握しながら、「サイレントe（マジックe）」から開始し、あせることなくゆっくり学習を進めた。附属小学校の英会話の担当教諭から、4年生児童は読める英単語が増えてきている傾向がみられるとの感想が寄せられた。さらに、2009年2月から2年生においてもアルファベットの大文字の読み方のみの学習を行った。

1.4 小学校外国語活動（英語）における反省的実践家の養成とポートフォリオ活用

近年、教師教育において、反省的実践家の養成（佐藤，1996）の必要性が指摘されている。反省的実践家（reflective practitioner）とはSchön（1983）が「反省的実践家－専門家は実践過程でどう思考しているか」で提起した概念であり、佐藤（1996）によれば、「技術的実践志向」から「反省的実践」をモデルとする教師教育が求められなければならない。ポートフォリオの作成過程には、様々な内省活動が内在する（Klenowski, 2002）ことから、反省的実践家としての教師の養成を具現化するための一つの有力な手立であると考えられる。ただし、事前打ち合わせや振り返りの実施にあたり、ゲスト・ティーチャー（Guest Teacher：以下GT）活動の活動回数が少ない場合、時間数の少なさを補足する手段として、内省活動を重視するポートフォリオという手法を用いることにより、小学校英語分野での教員養成における反省的実践家への態度養成に大なる効果が期待できることが確認されている（北條・松崎，2006）。

本研究では、GTポートフォリオを、「明確なガイドラインに沿って実習の成果を収集し、その成果に基づき内省や選択、コミュニケーションおよび形成的に評価を行いながら、教師としての成長を促し、小学校英語活動指導への意欲を高めるための目的付き実習ファイル」と定義づける。

2. 研究の目的：

本研究の目的は、小学校英語教育における反省的実践家養成のための養成プログラムを設計、試行し、その効果を明らかにすることである。

3. 研究の方法：

3.1 実験実施時期： 2009年2月～3月（GT出張授業の一定期間）

3.2 対象者： 教員養成系J大学生、学部生・大学院生計14名

3.3 測定具：

- ①ポートフォリオを活用した教員養成プログラムに関する5段階尺度形式9項目
- ②全体カンファレンスにおける自由記述式の最終的なGT授業に対するコメント

3.4 手続き：

設計上の留意点として、これまで実践してきた以下の4つの活動を組み入れた。

- ①ガイドラインの事前明示
- ②ゴールカードの実施
- ③カンファレンスの実施などのポートフォリオ作成過程での重要な活動
- ④仲間との学び合いの活動

実際のGT活動は毎週金曜日の筆者のゼミ活動において、必要とされる英語の学習、②英語教育に関する理論的学

習を行い、グループ・ワーク（適宜）として参加者が、①指導案の協同作成、印刷、配布、② GT授業の個々の学習活動に関する役割分担、③GT授業のリハーサルを実施した。さらに、自己調整学習（適宜）として、①必要とされる英語や英語教育に関する学習、②分担した学習活動に関する細案作成と練習を行った。最終的に、GT活動終了後、全体カンファレンスを実施した。

3.5 出張授業の手順：

2009年度の指導目標は筆者が附属小側と相談の上、決定し、担当学生に伝えた。参加学生は、3、4年生計4学級にわかれて担当した。担当学級ごとに大まかには月曜日に指導案を作成し、火曜日から木曜日にかけて必要な教具を作成した上でリハーサルを実施し、金曜日の授業に出かけるというルーティンをこなした。授業実施直後に参加学生全員によるカンファレンス（反省会）を実施した。また、金曜日に実施したGT授業はすべてビデオに録画した上、速やかにDVDを作成し、自分達の授業の様子をみて次回の授業の参考にした。2年生対象の授業は参加学生の希望者により同様のルーティンにしたがって実施された。

3.6 分析方法： 直接確率計算

4. 研究の結果と考察：

4.1 ポートフォリオを活用した教員養成プログラムに関する9項目の平均（M）と標準偏差（SD）

ポートフォリオを活用した教員養成プログラムに関する9項目の平均（M）と標準偏差（SD）は、表1に示すとおりである。5点満点で、9項目すべてが4.00以上であった。ここから同プログラムの参加学生は、同プログラムを高く評価していたことがわかる。

次に、全9項目について5段階尺度形式で回答の頻度数を算出したところ、1つのセルに0や5以下のセルがみられたため、改めて回答数を3段階（1と2を否定、3を中立、4と5を肯定）に計算し直したが、その結果は表2に示すとおりである。

さらに肯定的な回答と否定的な回答について直接確率計算を行ったが、その結果は表3に示すとおりである。表3をみると、全9項目において1%レベルで肯定的回答数が否定的回答数より多かった。

表1 教員養成プログラムに関する項目の平均（M）と標準偏差（SD）

番号	項目内容（1～6：ポートフォリオを活用したGT活動全体は）	M	SD
1	自分の反省的実践力向上に有効だった	4.79	.43
2	英語力の向上に有効だった	4.14	.86
3	自分の研究への意欲向上に有効だった	4.21	.89
4	教職への意欲を高めるのに有効だった	4.57	.65
5	ゼミの仲間関係作りに有効だった	4.79	.43
6	GT授業に対する仲間との準備に有効だった	4.79	.58
7	3～4人グループの指導体制は有効だった	4.86	.53
8	先輩のGT授業のDVD試聴は参考になった	4.79	.58
9	GT授業を撮影した速やかなDVD配布は有効だった	4.71	.61

(N=14)

表2 教員養成プログラムに関する項目の回答の頻度数

番号	項目内容（1～6：ポートフォリオを活用したGT活動全体は：）	肯定	中立	否定
1	自分の反省的実践力向上に有効だった	14	0	0
2	英語力の向上に有効だった	12	1	1
3	自分の研究への意欲向上に有効だった	12	1	1
4	教職への意欲を高めるのに有効だった	13	1	0
5	ゼミの仲間関係作りに有効だった	14	0	0
6	GT授業に対する仲間との準備に有効だった	13	1	0
7	3～4人グループの指導体制は有効だった	13	1	0
8	先輩のGT授業のDVD試聴は参考になった	13	1	0
9	GT授業を撮影した速やかなDVD配布は有効だった	13	1	0

(N=14)

表 3 教員養成プログラムに関する項目の回答数についての直接確率計算結果

番号	項目内容（1～6：ポートフォリオを活用したGT活動全体は：）	肯定、否定の回答に対する直接確率計算結果		
1	自分の反省的実践力向上に有効だった	.00	**	肯定>否定
2	英語力の向上に有効だった	.00	**	肯定>否定
3	自分の研究への意欲向上に有効だった	.00	**	肯定>否定
4	教職への意欲を高めるのに有効だった	.00	**	肯定>否定
5	ゼミの仲間関係作りに有効だった	.00	**	肯定>否定
6	GT授業に対する仲間との準備に有効だった	.00	**	肯定>否定
7	3～4人グループの指導体制は有効だった	.00	**	肯定>否定
8	先輩のGT授業のDVD試聴は参考になった	.00	**	肯定>否定
9	GT授業を撮影した速やかなDVD配布は有効だった	.00	**	肯定>否定

** $p < .01$ (N=14)

以上の結果から、全9項目の中では、項目8「3～4人グループの指導体制は有効だった」の平均が4.86であり、肯定的な回答者数が有意に多かったことから、同プログラムの参加学生は3～4名によるチーム・ティーチングを大変高く評価していたことがわかった。また、項目1、項目5、項目6の平均がいずれも4.79であり、肯定的な回答者数が有意に多かったことも合わせて考えると、同プログラムが反省的実践力の向上やゼミの仲間作りに有効であると捉えられていることもわかった。さらに、項目8の平均が4.79であり、項目9の平均が4.71であることと肯定的な回答者数が有意に多かったことから、これまでのGT授業の様子を記録したDVDを試聴したり、自分達の授業の様子を記録したDVDを試聴することを高く評価していることがわかった。

4.2 ポートフォリオから学んだこと：全体カンファレンスで得られた参加者からのコメント

2008年度に実施したポートフォリオを活用した教員養成プログラムにおいて、出張授業がすべて終了した後に、全体カンファレンスを実施した。同プログラム参加者全員のうち9名による同プログラムにおいて得られたり感じたりした「反省的実践家としての向上」、「英語力の向上」、「理論的根拠に対する理解」、「これから挑戦したいこと」についてのコメントを以下に紹介する。以下に示すように、さまざまなコメントが得られた。

4.2.1 反省的実践家としての向上について

- 実践を通して学んだこと：児童の学ぶ意欲を高める指導の工夫、楽しい雰囲気でのウォームアップ（歌やチャンツ・アルファベット体操）、体験的活動を取り入れた展開の工夫（ジェスチャー・スペルゲーム）、既習事項との関連を図った展開の工夫、既習の単語をチャンツで復習する場面を設定。
参観授業から学んだこと：身近な生活との関連、「YシャツのY」「九官鳥のQ」など、動作と言葉を関連させた語彙指導（polishとその動き）、学習形態の工夫（全体・列・ペア）活動の時間の十分な確保、提示の仕方の工夫、教師の発問や指示の工夫（ジェスチャー・声の大きさ・トーン）（Carol）
- 自分の授業に対しては客観的に、仲間の授業に対しては主観的に観察し、振り返ることができるようになった。同じ失敗を2度繰り返さないように、授業前には前回のDVDの視聴を毎回するようになった。同じ授業内容であっても、少しの新奇性と創造性を取り入れ、より良い授業になるように努力した。（Kevin）
- 授業後のカンファレンスでは、参観者の率直なアドバイスや改善点をいただいた。自分では気づかないであろう指摘を受けることも多かったため、授業改善のためのヒントを得られる機会となった。さらに、授業の録画DVDを見直すことで、自分自身の授業を細部まで観察し、自分が思い描いた授業を行うことができたかを自己反省できた。ここでは自分自身を客観視できる、絶好の「振り返り」の機会であった。このような振り返りができたからこそ、常に向上意欲を持って出張授業に臨めたと思う。（Kibi）
- 他者の反省を聞くことで、新たな視点を見つけることができた。また、自分の授業を幅広い視点から、見直すことが出来るようになった。グループ内で反省し合うことで、次の授業の改善につなげることができたと思う。（Monica）
- 毎回の授業で良かった点、反省点を振り返ることで、次の授業で「ここは、絶対気をつけよう」という目標を持つことができた。授業を振り返ることで、次の授業を行うにあたり、不安を軽減することができた。他者の意見や感想を聞くことにより、自分一人では気がつかないところにも意識が向くようになった。（Marie）
- 自分の実践を、“失敗だった～。”と嘆くだけでなく、何が足りなかったのか、どのような改善が必要かを、考えることができるようになった。他の人の実践を、自分のものと比較し、自分のレベルアップに生かすために鑑賞

できるようになった。“もっとよいものを”と、向上を目指す姿勢が身についた。(Judy)

- 子どもたちの反応を見ながら、ジェスチャーなどを使って授業を進めること。歌、ゲームで子どもたちをひっぱっていく工夫。授業にオリジナリティや自分らしさを出していくこと。(Ann)
- その場に応じた臨機応変な英語表現の使用を可能にすること。児童全体を見渡して話したり、活動したりできるようにすること。児童全員をしっかりと見ながら授業を進め、児童の反応や表情を把握すること。(Ron)
- 回を重ねるごとに、児童の顔を見ることができるようになった：とても緊張する方で、毎回ドキドキしていました。こちらが緊張していると、児童にもそれが伝わってしまい、児童も緊張してしまいます。しかし、毎週行くうちに、児童との距離もしだいに縮まり、授業を進めるときにも児童の顔を見ながら話すことができるようになったと思います。不安いっばいで授業を進めていくよりも、自分も一緒になって、児童と楽しむこともとても大切だと感じました。最終回の授業のSee You Songをみんなで歌う時、全員の顔が見られたことが今でも印象に残っています。

デモンストレーションの大切さ：私たちの英語の授業はAll Englishで行ったため、児童はすべて話すことが分かるわけではありませんでした。なので、初めてやること（ゲームなど）の説明をどうやって説明しようか悩みましたが、先輩たちのアドバイスの通り、「やってみせる」ことがとても大切だと感じました。ただ言葉で説明するよりも、児童の理解が進みました。またその時授業者は大げさなくらいの動作やリアクションでやると、児童ものってくるなど感じ、授業者が演じることの大切さも感じました。(Melissa)

4.2.2 英語力の向上について

- ①クラスルームイングリッシュの使用：わかりやすいクラスルームイングリッシュを使用②発音指導：母音や子音の発音を意識し指導するよう心がけた。二重母音など児童が正しく発音できるよう丁寧に指導したい。英語のリズムやイントネーションに気をつけ、正しい英語のインプットができるよう努力したい。③歌・チャンツの導入：題材との関連を図った歌やチャンツについても調べたい。④子供のがんばりを認める：子供のがんばりを認め、励ますよう心がけた。英語での賞賛の表現を積極的に使っていくようにしたい。(Carol)
- phonicsの指導ということもあり、常に自分の発する英語の発音を音声学のソフトを用いて確認し、よりきれいな英語を心がけた。なるべくわかりやすいClassroom Englishをたくさん使うために、専門書を購入し、覚えようとした。サイレントeのオリジナルフラッシュカードを作り、子どもに発音が変わる文字と発音しない文字の位置を示すことができた。(Kevin)
- 今回の出張授業ではphonicsを扱ったため、正しい英語の発音を心がけるようにした。
録画したDVDを見直して発音の自己チェックも行うようにしてきたが、最も有効だったのは参観者からの指摘であった。特にH先生が“lion”の発音や各アルファベットの発音を細かくチェックして指摘してくださったので、誤りを確実に意識することができた。出張授業は正しい発音を意識できる絶好の機会となった。自分が起こした発音の誤りは今後の英語活動では改善できるよう、生かしていきたい。(Kibi)
- 実践授業を始めた当初、言いたいことが言えずに困っていた。しかし、回を重ねるにつれて、クラスルームイングリッシュが自然に出るようになった。語彙を増やそうと参考書を見たりしながら、努力したこと。TOEICを受験するなど、英語力を向上しようとする態度に変化が見られた。(Monica)
- 頻繁に使われるクラスルームイングリッシュを活用することができた。ゲームのルール説明やデモンストレーションの時に、できるだけ端的で明確な英語を使い、子どもにわかりやすく伝わるように心がけた。(Marie)
- ぐんと伸びた、ということではなかったが、自分の英語力を維持する良い機会だった。
“間違った英語は教えられない”という原則があったので、自分の英語について、改めて考え、注意してクラスルームイングリッシュを使う癖がついてよかった。(Judy)
- 授業でする指示を英語で正確に行う力、子どもたちの予想外の反応にも英語で対応できる力、発音（事前の発音の確認、しっかりとした練習）、Classroom Englishの知識 (Ann)
- クラスルーム・イングリッシュを積極的に活用すること。活動の際に児童に対し様々な英語表現を使って声をかけること。(褒める言葉や指示の言葉など)、教材を作成するに際し、適切な発音や表現をしっかりと理解すること。(Ron)
- 毎回自分が話すことを書き出す：このことによって、少しは言葉に詰まることなく、話せたのかなと感じています。書き出すことで、間違いを発見できたり、どうやって言うんだらうと自分で考えたりすることができました。しかし、「とっさの一言（児童の反応に対する声かけなど）」を事前に準備しておけばもっと良かったと感じています。
その日のチャレンジの内容は発音まできちんと練習：特に、「食べ物」を扱ったときに発音が不適切だったと注

意を受けました。これは自分たちの英語力の低さと、練習不足だととても反省しました。教える側は絶対に間違った英語を使ってはいけないと改めて考えました。そのためにも、授業者同士で発音のチェックをしあったり、辞書をもう一度引いて確認したりということも必要だなと感じました。(Melissa)

4.2.3 理論的根拠に対する理解について

- 4年生での授業実践より(文字に親しませる活動の工夫)：①文字入りBONGO, ②ジェスチャー・スペルゲーム, ③アルファベットの小文字の形を意識したアルファベット体操。樋口(2005)：文字指導では、段階的な指導が必要であり、文字を無理に教え込もうとせず、音声中心の指導の中で「文字を使って遊ぶ」活動を取り入れることで文字への認識を高め、リーディングへの興味へとつなげることが大切；〈文字指導の意義〉①「児童の知的欲求、興味に合致している」②「文字が記憶の手立てとなり、記憶を保持させる」③「聴覚情報に視覚情報が加わることで内容理解が進み、英語学習を促進させる」：Step 1：文字に慣れ親しむ(文字付き絵カード), Step 2：文字の形を知る(文字カードを使ったゲーム, アルファベットの形を身体で表わす人文字作り, カルタ, ビンゴゲームなどで文字の形を認識, Step 3：大文字, 小文字の識別。野呂(2007)：「音声による英語学習を支援する一つの方略として文字を導入すれば、中学校の英語学習とよい連携を図ることができる」, 「フォニックスを取り入れた文字指導は小学校と中学校がうまく連携できる領域の一つ」(Carol)
- 小学校英語の書籍に載っている知識や理論を実践場面で積極的に取り入れ、生かしてみた。アルファベットのnとmの鼻音の名前をどのように発音すれば、聞き取りやすいか、また今後の学習につなげられるかを先行研究を踏まえて実践した。単語練習で、子どもが発音しやすいチャンツのリズムや速さを研究した。(Kevin)
- 事前に参考書を読んで、理論的事項を読んでおいたにもかかわらず、それを実践でうまく生かすことは殆どなかった。例えばrの発音では「口を十分にすぼめてwを言う態勢で舌の先を丸めて・・・」と記述があったが、読んで理解することは難しかった。むしろ、昨年度授業をされたKさんの授業(DVD)を参考にしながら学んだほうが多かった。百聞は一見にしかず、とはこのことである。(Kibi)
- 自分が文献を読む時に、常に附属小の子ども達を想像しながら読むようになった。文献への理解を深め、実践現場で生かしていこうとするようになった。まとめて、人に伝えることで自分の理解も深まるようになった。他の人の発表は、題も幅広く自分の視点を広げるのに役立った。(Monica)
- ゼミで他の学生の発表を聞く際に、自分自身の活動と照らし合わせながら、興味深く聞くことができた。(Marie)
- あまり向上は見られなかった。今後、自分のおこなっている指導に理論的自信を持つため、学んでいきたいと思う。(Judy)
- 日本人にとって難しいとされている英語の発音も、ジェスチャーや教材を使っただけの指導が習得の手助けになる。(Pの発音での紙を使った指導, aとeの発音の区別での口の絵の教材を使った指導, lやrの発音における動ジェスチャーを使った指導)(Ann)
- 各学年の児童に対し、またそのクラスごとに対し、どのような教材・教具が適しているかを考える。活動に使用する教材を吟味し、その意味と効果を理解する。(児童が興味を持って活動に参加できるような題材を見つけること)(Ron)
- 児童の学年や理解度に合わせた授業内容：内容が難しいものは、復習を入れながらゆっくり丁寧に教えていくことが大切だと感じました。英語の授業では無理せず、ゲームや楽しい活動を入れ、楽しみながら進めていくことが重要だと分かりました。しかし、内容が簡単過ぎて飽きてしまってもいけません。少しずつ変化を加えて、レベルアップしていく必要もあると感じました。そのためにも、児童の実態を掴むことが一番大切です。授業者が一方的に進めていくのではなく、児童の反応をしっかりとらえ、一緒に授業を作っていくことが重要だと感じました。(Melissa)

4.2.4 これから挑戦したいことについて

- 児童の興味関心や実態に応じた題材の工夫、歌やチャンツを取り入れた授業、スペルゲームなど文字を意識させる活動、「書く活動(なぞり書きなど)」の導入、視聴覚教材(ビデオやソフト)を活用した授業、絵本(Big Book)を活用した授業(Carol)
- Classroom Englishは、中学校の教育実習でも練習したので、基本的な指示、注意、誉めるなどの表現はある程度できていたが、小学校英語活動ならではのゲームやアクティビティなどの指示は、モデルやジェスチャーにほとんど頼って、英語のインプットが疎かになってしまう場面が多かった。今後は少しずつでもゲームやアクティビティにおいて、子どもにわかりやすく、見通しのあるClassroom Englishを聞かせていけるように努力してみようとする。(Kevin)

- 今までKさんや私たちが実践してきたもの以外にも私がまだ知らないフォニックスの教授法がまだあるように思える。先月末（2月）のOxfordのワークショップでは、英語絵本を使ったやり方や、英語劇を通して体験的にフォニックスを教えるやり方を知った。今後私が担当する児童に適切であれば、このようなやり方も試してみたい。現段階としては、可能な限りこのようなワークショップに参加し、様々な教授法を学習するとともに、小学校英語教育に対する自分自身の視野を広げていきたい。（Kibi）
- 自分の英語力の不足に気づいたので、英語力の向上に努めていきたい。自分の実践に生かしていくことができるよう、研究に関する論文を読む中で課題を見つけたり、自分なりに考えていくことができるようになりたい。様々な視点から、物事を見ることができるよう研究に関して、授業に関しても他の人と話しあう機会があればいいなと思う。（Monica）
- 授業での反省点をよりよく次の授業に活かすために、こうなりたいという長期的な目標と次の授業までにできる短期的な目標を考える。授業で臨機応変に振舞えるように、英語力を高める。どのような成果が期待されるかの根拠を調べた上で、授業で取り入れるアクティビティを考えるようにする。先行研究などを調査し、授業に役立てる。失敗しても凹まず、次に繋げようと気持ちを切り替える。（Marie）
- 生徒側に寄り添って、つまづいている生徒やモチベーションの上からない生徒に個別に対応していきたい。子どもたちの気持ちをうまくつかんで、集中と楽しさを兼ね備えたメリハリのある授業を考えていきたい。チームティーチングもさらに磨いていきたいし、単独の授業も挑戦していきたい。（Judy）
- 他クラスの授業などを参考にして、自分の授業を振り返り、さらに工夫していくこと。それでも自分達らしい授業を作っていくこと。児童と一緒にになって英語を楽しめるような授業をすること。自分の英語力の向上に努める、使えるClassroom Englishを増やす。（Ann）
- 活動している児童一人ひとりに簡単な英語を使ってコミュニケーションをとってみる。ゲームだけでなく、実際の英語の指導に関する内容も担当すること。英語の発音をもっと勉強すること。（自分自身の英語力の向上）様々な小学校英語の研究授業を積極的に参観し、授業の方法や指導力を学ぶこと。（Ron）
- 英語力を高める：これは永遠のテーマだと思います。言語を習得するのは本当に難しい事だと思います。まず自分ができる事として、発音の更なる向上と練習。クラスルームイングリッシュのバリエーションを増やすことをあげたいと思います。先輩や現職の方のいい所をもっと良く見て、記録する：やはり経験を積んでいる方の授業の進め方はとっても上手いと思います。今回でもたくさんの事を学ばせてもらいましたが、自分の事が精一杯でありじっくりと観察することができませんでした。また観る視点もバラバラだったと思います。今回経験したからこそ、ここはどうやったら上手く進められるだろうかという疑問も出てきたので、次回はさらに先輩方のいい所を自分の物にできるようにしたいと思います。また感じたり、発見したりしたことを、記録する習慣を付けたいと思います。（忘れてしまうので。）（Melissa）

[本研究は、平成20～22年度科学研究費基盤研究(C)「ポートフォリオ活用による反省的実践家としての小学校英語教員養成」の成果の一部である。]

引用・参考文献

- ベネッセコーポレーション校英語に関する基本調査（教員調査）第2部 第1章 第1節英語活動の実態」2010年9月1日検索。
http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo-eigo/2006/pdf/data_07.pdf
- Curtain, H., & Pesola, C.A. (1994). *Languages and children: Making the match* (2nd ed). White Plains, NY: Longman. (伊藤克敏ほか(編). 『児童外国語教育ハンドブック』. 東京: 研究社, (2005). 樋口忠彦他編. (2005). 「これからの小学校英語教育—理論と実践—」. 東京: 研究社.
- 長谷川信子. (1997). 『第3章小学校からの外国語教育』. 樋口忠彦編. 東京: 研究社出版株式会社.
- 北條礼子・松崎邦守. (2006). 「ポートフォリオを活用した大学生ゲスト・ティーチャー (GT) による英語活動の試み—反省的実践家養成を目指して—」. 『小学校英語教育学会紀要』. 第6号. 43-48.
- 北條礼子・大田亜紀. (2009). 「幼稚園児・小学生の知的好奇心を刺激する英語教育の学習プログラムの構築」. 『教育実践研究』. 第19集. 19-26.
- Klenowski, V. (2002). *Developing Portfolios for Learning and Assessment: Processes and Principles*. London: Routledge Falmer.
- 松川禮子 (編著). (2003). 『小学校英語活動を創る』. 東京: 高陵社書店.
- 松川禮子. (2004). 『明日の小学校英語教育を拓く』. 東京: アプリコット.
- 文部科学省. (2001). 『小学校英語活動実践の手引き』. 東京: 開隆堂.

- 文部科学省. (2008). 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」. 東京：東洋館出版社.
- 文部科学省. (2009). 『英語ノート1 完全対応指導ハンドブック1』, 『英語ノート2 完全対応指導ハンドブック2』. 東京：開隆堂.
- 文部科学省. (2009). 「教育課程の編成・実施状況調査」. 2010年9月12日検索.
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/new-cs/1263169.htm>
- 中山兼芳編. (2001). 『児童英語教育を学ぶ人のために』. 京都：世界思想社.
- 野呂忠司. (2007). 「小中連携と文字指導」『小学校英語と中学校英語を結ぶー英語教育における小中連携ー』. (松川禮子・大下邦幸編著). 東京：高陵社書店. 102-118.
- 旺文社英語教育研究室. (2009). 「小学校の英語活動に関するアンケート調査結果報告」. 『週刊教育資料』. 42-50. 東京：教育公論社.
- 佐藤 学. (1996). 『教育方法学』. 東京：岩波書店.
- Shöne, D. (1983). *The reflective practitioner: How professional think in action*. NY: Basic Books.

Design and Trial of a Program of Nurturing Reflectiveness: The Portfolios of Student-Teachers of English at Elementary Schools

Reiko HOJO*

ABSTRACT

In April of 2011, foreign language (English in principle) activities will formally be introduced into all the public elementary schools in Japan. Classroom teachers are expected to be mainly in charge of the activities at the elementary schools. Under these circumstances, in order to enhance the English activities, it is crucial to nurture English teachers who could be responsible for the activities as well as conduct English training courses for elementary school teachers.

From January to March in 2009, 14 university students and graduate school students of our University participated in a project utilizing portfolios which aimed to nurture student-teachers' reflective attitudes toward teaching. Data was obtained through a questionnaire and the student-teachers' comments at a conference held at the end of the project. The results showed that the project utilizing the portfolios was highly evaluated by the participants.

* Humanities and Social Studies Education